

2024 AUTOBACS SUPER GT Rd.7 AUTOPOLIS GT 3Hours RACE REPORT



SUPER GT 2024 第7戦オートポリス レースレポート

開催日：予選 10月19日／決勝 10月20日
開催地：大分県 オートポリス

予選レポート

10月19日のオートポリスは、雨が降り続き濃霧により視界も悪いことから9時20分より予定されていたSUPER GT公開練習のフリー走行は9時40分、10時と時間を順延。10時を過ぎても天候は回復することはなく、レースコントロールはやむなく午前中の走行の中止を宣言するに至った。

8月末に予定されていた第5戦鈴鹿が台風の影響で12月に延期となり、9月21日

の第6戦スポーツランドSUGOは雨のため予選を行わずに公開練習のタイムでスターティンググリッドを決めた上に、翌22日の決勝レースは1時間遅延でのスタート。そして、このオートポリスとしてのピットウォーク以外の全ての公式プログラムが中止され、予選は10月20日の8時より300、500の各クラスとも30分という時間の中でタイムアタックが行われることとなった。



10月20日の8時ちょうどにコースオープンとなった予選。9号車「PACIFIC ぶいすぽっ NAC AMG」は、富林勇佑選手が予選を担当する。30分という時間の中で一番速いタイムが採用されるという形式で、ドライバーのタイム合算やノックアウト方式などではなく、正真正銘「一発勝負」の予選が始まったのである。

濃霧の中で視界はかなり悪く、また雨は上がってはいるものの路面状況はウェット宣言が出る程度に濡れている。レインタイヤで予選に挑んだ9号車「PACIFIC ぶいすぽっ NAC AMG」だが、ライバルの中にはドライ用のスリックタイヤで挑むマシンもある。序盤の濡れている路面にスリックタイヤが合わないのかスピンをする

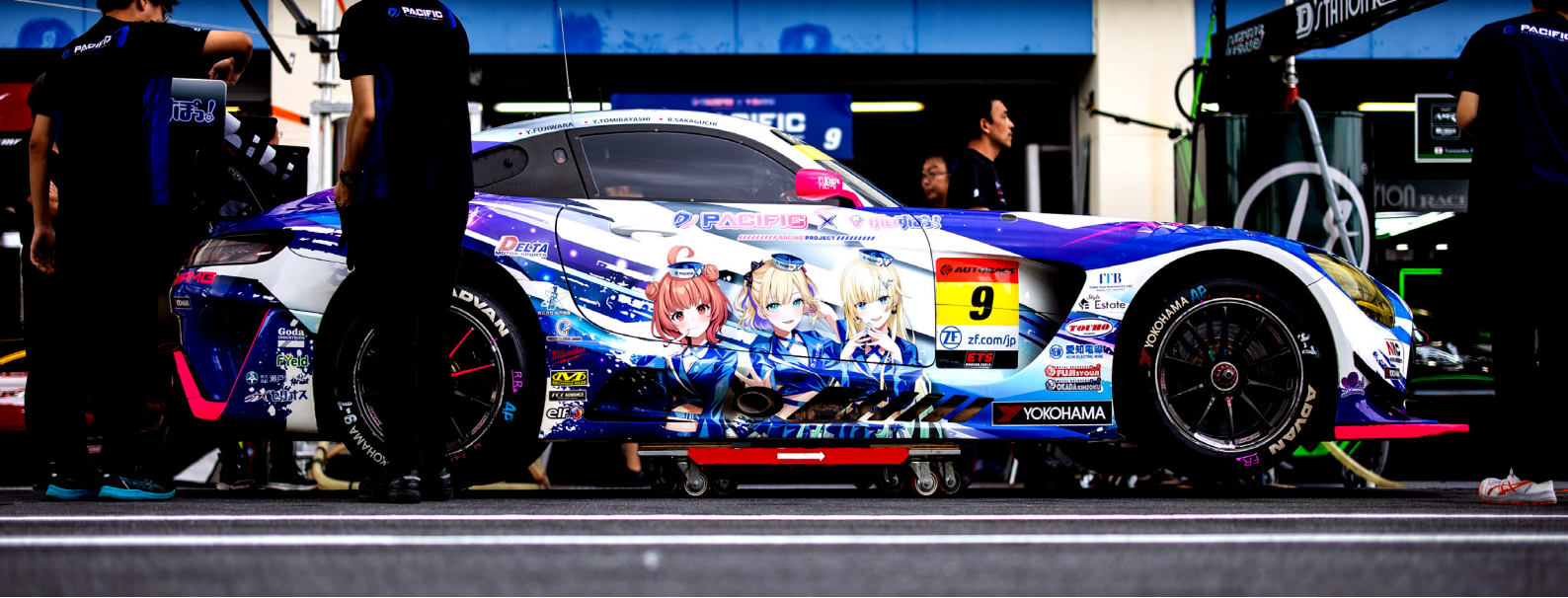
マシンが続出。そして走行開始から23分ほどたったころには、ライバルのコースアウトによる赤旗提示で、予選は中断となってしまった。

中断から4分後の8時27分に、予選が残り時間6分で再開。9号車「PACIFIC ぶいすぽっ NAC AMG」もドライ用のスリックタイヤで残り時間に挑む。

富林選手が残り時間ギリギリで4位につける1分48秒202でチェッカーを受ける。しかし、その後に後続マシンがタイムを上げてのフィニッシュをしてきたことにより、全車走行が終わった段階で8位という順位となった。この順位であっても、これまでの予選では最高位と言えるのだが、この後に大きな幸運が待っていた。決勝前のウォームアップ走行中に予選の正式結果が変更となったのだ！

この変更により「9号車 PACIFIC ぶいすぽっ NAC AMG」は予選順位が6位、GT300の3列目グリッドという、今期最高位のポジションからスタートすることとなったのである。





決勝レポート

10月20日の11時30分より、通常よりも長めの40分間というウォームアップ走行が行われ、その後、各マシンはスターティンググリッドへと整列されていく。予選結果の改訂により6番グリッドというポジションを得た9号車「PACIFIC ぶいすぽっ NAC AMG」は、初のポイントに期待がかかる。スタートドライバーは阪口良平選手。

決勝がスタートする直前の気温は16度、路面温度は23℃で天候は曇り。肌寒さすら感じる中で13時20分に大分県警



の白バイやパトカーが先導する交通安全啓蒙のパレードラップからフォーメーションラップ、そして13時26分に3時間レースのスタートが切られた。

9号車「PACIFIC ぶいすぽっ NAC AMG」は好位置からのスタートであったがスタートラップからタイムが伸びず、2周目で8位まで後退、その後もじりじりと順位を下げていってしまう。1時間経過した辺りでは、15位となっていた。原因はトランスミッションのトラブルで、特に5速以上のギヤを選択するとトラブルに見舞われてしまう。



38分が経過した頃、GT500マシンがコースサイドでストップし、フルコースイエロー（FCY）が提示。その後セーフティカー（SC）の導入となり、53分が経過した頃に解除となる。しかし、1時間11分経過の頃にGT500マシン同士が接触し、1台がコースアウトからのクラッシュとなり再びSC導入。

9号車「PACIFIC ぶいすぽっ NAC AMG」は、1時間5分を経過の頃にすでにピットインを終えていたので、2度目のSCでの影響を受けることはなくコースに復帰していった。ドライバーは、藤原優汰選手へとチェンジ。ただしミッショントラブルは改善されることはなく、そのままのコース復帰となっていたのである。

22位でのコース復帰から、ミッショントラブルを抱えながらも藤原選手はいい走りを見せてくる。1時間45分経過のあたりで19位まで順位を上げてきた。そして2時間経過のあたりでピットイン。ドライバーは畠林勇佑選手に替わり、最後の追い上げを見せようというのだ。

前に走った2人の選手からのフィードバックや、畠林選手の創意工夫もあり、トラブルが出る5速以上のギヤをなるべく使わない走り方で完走を目指す。23位でコースに復帰しながら、2時間40分経過の頃には2台を抜いて21位に順位を上げてきた。もう少し前へ行けそうな雰囲気を感じた2時間14分経過の頃、なんとGT300で5位を走っていたライバルが第2ヘアピン付近でクラッシュ。FCYからSC導入となりそのままSCフィニッシュとしてレースは終了となった。

もしかしたらあと2つは順位を上げていたかもしれない。そんな思いがつのるレース終盤ではあったが、トラブルに屈せず完走を果たした意味は大きい。そう感じざるを得ないレースだったと言えよう。





Comment

エントラント代表 神野元樹



悪天候の影響が3戦も続き、フルパッケージでのレースが出来ないまま消化不良を感じざるを得ない「秋のSUPER GT」ですが、満足な走行が出来ず、得られるデータが少ないながらもチームは一丸となってレースに取り組んでいっています。トラブルが出てしまうということに関しては、マシンの調整などで解決に向けた動きをしています。

阪口良平 選手

天候に左右されるという場面も仕方ないことではありますが、土曜日に全く走っていないということによる影響は他のチームも同様なので、そこに関しては特に問題を感じることはありません。マシンのミッショントラブルについては悔しい思いをしていますが、それ以外の部分についてはかなりポジティブな感じを掴めています。



富林勇佑 選手

予選中には全くトラブルが出ることは無かったので、メルセデスAMG GT3勢で最速タイムを出すことが出来ました。このトラブルを克服できれば、上位を狙えるということをはっきりとさせた予選だったと思います。ストレートが長いコースで上のギヤを使うとトラブルが出るので、今回は4速ギヤまでしか使わないというドライビングでカバーしてきました。



藤原優汰 選手

今回は1時間弱という長い時間を担当しました。ミッショントラブルで速さを失ったところは残念でしたが、クルマを壊すことなく富林選手に預けることが出来て何よりでした。トラブルが出てしまってもリタイヤすることなく完走を目指すというところに、チームが一つとなってレースに取り組むということの意味を知った気がします。

